

「国語力は人間力」講演 吉永幸司氏

神戸おもちゃばこ 大岡英樹

相対評価は教師を墮落させる

国語は、日常に溢れており、授業だけではなく、毎日の生活が国語。しかし、子どもたちは、授業では使えるが、教室を離れると途端に使えなくなる。だからこそ、吉永先生は、生きた場で使えるようにすることが大事ではないかと考えるようになったそうです。

講演では、「あゆみを親に渡すときの儀式」「挨拶の大切さ」「子どもの書いたものを必ず読む」「連絡帳に〇をつける」「ノート指導」「学級通信で「挨拶」「トラブルの事実を伝える子どもの育成」「振り返り指導」など授業だけではなく、日常生活を言語生活の場とする具体的な事例を教えていただきました。既に実践していると感じるかもしれませんが、吉永先生の指導は、「話す・聞く」ことをねらいとしているようです。

例えば、学級通信を初めて発信する場合には、「伝え方がよければ、親から一言も「らえる」と語りかけ、どのように親に渡したのか、その際にどのような言葉がけをしたのかを交流するそうです。

また、あゆみは、「ありがとう」と言うて親に渡すように指導されるそうです。それができるようになると、きちんと前に親を座らせて儀式のように渡す形に発展させるそうです。

そして、トラブルがあった際に、事実を親にしっかり伝えられない子どもの姿から、授業の振り返りの指導に力を入れたそうです。トラブル時に自分で事実を伝える力、すなわち、大事なことを落とさず伝える力は国語のねらいそのものです。

私などは、トラブルがあった場合には、子どもではきちんと伝えられないと思い、保護者への連絡をします。しかし、それが子ども達の伝える力を育む機会を奪っている

のかもしれないと思ひ返しました。伝えることが苦手なら、伝えられるように指導することこそが、教師のあるべき姿なのだと気づかされました。

吉永先生から学んだことは、日常生活の様々な場面を国語の授業だと考えるという視点です。国語力を鍛えることによつて、人間力を高めていくのだと納得しました。目の前にいる子どもの姿から課題を発見し、解決するために言葉を指導する。何か特別なことをするのではなく、日常生活にありふれている伝える力の質を高めることが重要なのだと感じました。

アンケートより

・「日常の国語教育は保健室から」「通信の渡し方」など、すべての場面が国語の授業となるといふ考え方が徹底されていることに感銘しました。

・拝聴させていただき、自分の国語の授業改善への意欲が湧いてきました。